

啄木詩集

大岡 信編



啄木（1886 - 1912）の短歌の2、3首ならだれもが口ずさめるが、では詩はどうだろう。戦後の一時期を除くほか読まれることの少なかった啄木

詩の精髓を編者に人を得てここにお届けする。啄木は処女詩集『あこがれ』で早くも驚くべき文語駆使の能力を発揮するが、その真価は贅肉をことごとくそぎ落した感のある晩年の口語体詩にあった。



緑 54-2
岩波文庫

たくぼく ししゅう
啄木詩集

1991 年 11 月 18 日 第 1 刷発行 ©

編 者 おお 岡 まこと
大 岡 信

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります

印刷・三 陽 社
製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-310542-7

岩 波 文 庫

31-054-2

啄 木 詩 集

大 岡 信 編



岩 波 書 店

目 次

『あこがれ』より	九	ひとりゆかむ	二〇
人に捧ぐ	二	マカロフ提督追悼の詩	二四
海の怒り	三	我が世界	三五
いのちの舟	二六	めしひの少女	三〇
鶴飼橋に立ちて	三七	啄木鳥に	三三
『あこがれ』以後	四〇	年老いし彼はあき人	三七
「新体詩 桜人」より	四七	蟹に	五〇
卯月の夜半	五七	馬車の中	五九
「仏頭光」より	六〇		
東京	六一		

泣くよりも……………六二

あによめ……………六三

殺意……………六五

弁疏……………六七

散文詩

曠野……………六九

白い鳥、血の海……………七六

火星の芝居……………七九

二人連……………八四

祖父……………八八

黒き箱……………九六

老人……………九八

おどろき……………一〇一

一塊の土……………一〇三

無題(屋根又屋根……………一〇五

無題(赤！赤！……………一〇

心の姿の研究

一夏の街の恐怖……………一二四

二起きるな……………一二七

三事ありげな春の夕暮……………一二九

四柳の葉……………一二二

拳……………一二三

騎馬の巡査……………一二五

詩六章

一路傍の草花に……………一二七

二口笛……………一二九

三手紙……………一三〇

四花かんさし……………一三一

五あゝほんとに……………一三二

六昨日も今日も……………一三三

呼子と口笛

はてしなき議論の後	・	一三五	古びたる鞆をあけて	・	一四五
ココアのひと匙	・	一三七	家	・	一四六
激 論	・	一三八	飛行機	・	一五〇
書斎の午後	・	一四二	「呼子と口笛」補遺	・	一五二
墓碑銘	・	一四三			
解 説	・		(大岡 信)	・	一五九

『あこがれ』より

人に捧ぐ

君が瞳ひとたび胸なる秘鏡の

ねむれる曇りを射しより、醒め出でたる、

瑠璃羽や、我が魂、日を夜を羽搏ちやまで、

雲渦ながるる天路の光をこそ

導きたる幻眩き愛の宮居。

あこがれ浄きを花霽匂ふと見て、

二人し抱けば、地の事破壊のあとも

追ひ来し理想の影ぞとほゝゑまるる。

こし方、運命の氷雨を凌ぎかねて、

詩歌の小笠に紅の緒むすびあへず、
愁ひの谷をしたどりて足悩みつれ、
峻しき生命の坂路も、君が愛の
炬火心にたよれば、黯き空に
雲間も星行く如くぞ安らかなる。

(癸卯「明治三十六年」十一月十八日)

海の怒り

一日のつかれを眠りに葬らむとて、
日の神天より降り立つ海中の玉座、
照り映ふ黄金の早くも沈み行けば、
さてこそ落ち来し黒影、海を山を
領ずる沈黙に、こはまた、恐怖吹きて、
真暗にさめたる海神いかる如く、
巖鳴り碎けて、地を噛む叫号の声、
矢潮をかまけて、狂瀾陸を呪ふ。

寄するは夜の胞盾どる秘密の敵。

――

墮落^{おち}てはこの世に、暗^くなき遠^かき昔^みの
信^{まこと}のおとづれ呬^{ささ}やく波^{なみ}もあらで、
あ^なあ^な人^{ひと}、眠^ねれる汝^{なれら}等^らの額^{ぬか}に、罪^{つみ}の
記^{しるし}徴^しを刻^きむと、か^かくこ^こそ潮^{うしほ}狂^{くる}ふに、
月^{つき}なき荒^あ磯^{いそ}辺^べ、身^みひとり怖^{おそ}れ惑^{まど}ふ。

(癸卯「明治三十六年」十二月一日)

いのちの舟

大海中の詩の真珠

浮藻の底にさぐらむと、

風信草の花かほる

吾家の岸をとめて漕ぐ

海幸舟の真帆の如、

いのちの小舟からやかに、

愛の帆章額に彫り、

鳴る青潮に乗り出でぬ。

遠海面に陽炎の

夕彩^{ゆうあや}はゆる夢の宮、

夏花雲^{なつばなぐも}と立つを見て、

そこに、秘^ひめたる天^{あめ}の路^{みち}

ひらきもやする門^{かど}あると、

貢^{みつぎ}する珠^{たま}、歌^{うた}の珠^{たま}、

のせつつ行けば、波の穂と

よろこび深く胸^{むね}を撼^ゆる。

悲哀^{かなしみ}の世の黒潮^{くろじお}に

はてなく浮^うぶ椰子^{やし}の実^みの

むなしき殻^{から}と人^い云^いへど、

岸^しこそ知らね、死^しの疾風^{はやち}

い捲^まき起^{おこ}らぬうたの海、

光の窓^{まど}に凭^よる神の

瑪瑙めのうの蓋さきの覆かえらざる

うまし小舟を我は漕ぐかな。

（甲辰〔明治三十七年〕一月十二日夜）